

マーケット概況（2020年8月）

8月の債券相場は、日経平均株価が大幅に上昇したことから売りが優勢となり、10年359回債の利回りは0.020%で始まった。4日の10年債入札は順調に通過し、債券先物9月限は152円55銭まで上昇し、5日には10年359回債が6月15日以来の0.000%まで低下した。しかしながら、日米ともに堅調な株価の推移を背景に債券安の流れが進み、11日には債券先物9月限は152円を割れの水準まで売られた。また14日には日経平均株価が約半年ぶりの高値を付ける場面では、10年359回債の利回りは0.045%まで上昇した。その後、4～6月期の実質GDPが年率換算で-27.8%と戦後最大の減少幅となったものの、事前予想の範囲内であったことから反応は薄く、金利上昇から押し目買いが見られる場面もあったが、27日に開催される米カンザスシティ連銀主催の国際経済シンポジウム（ジャクソンホール会議）でのパウエルFRB総裁の講演に向けて様子見姿勢が強まった。注目の講演では、新指針を説明するとともに物価が明確に上昇するまで利上げを見送る考えが示され、米国市場は株高債券安で反応した。本邦市場も同様の流れを引き継いだ。28日に安倍首相の辞任報道が伝わると、日経平均株価は一時600円超の下落となり、債券先物9月限も一時151円30銭まで売られ、10年359回債の利回りは0.055%まで上昇した。月末には超長期ゾーン中心に買いが入り、結局10年359回債の利回りは0.045%で今月の取引を終えた。

<短国市場>

3M金利は大量増発の影響から月前半は上昇したが、後半に入ると投資家需要に支えられて低下した。7日の3M928回債入札、14日の3M929回債入札はともに最高落札利回りが-0.06%台と、前月末の-0.08%台から上昇した。その後は投資家需要を背景に28日の3M933回債入札は-0.08%台に低下し、-0.127%で月内の取引を終えた。国庫短期証券買入オペで3Mが先行して売却されたことから6M・1Yは需給環境が改善せず、19日の1Y930回債入札は最高落札利回りが-0.13%台、24日の6M932回債入札は-0.10%台となり、セカンダリー市場ではいずれも-0.1%台前半で推移した。

<一般債市場>

8月は10年政保債の起債が無く、ベンチマークとなる10年地方債のスプレッドは国債カーブ+11.0bpと前月比1bp縮小した。2ヵ月連続してタイト化したが、既発債の流通実勢に沿っていることやシ団方式の銘柄が少ないこともあり、販売は好調だった。5年地方債は前月比同水準の0.02%クーポンとなり無難に消化された。社債では、8月は夏季休暇シーズンを挟み一般事業会社の起債が閑散となったことから、発行額は2,530億円に留まった。JR西日本が50年債を含む超長期債を中心に5銘柄計1,100億円、京成電鉄、名古屋鉄道が社債等買入オペ対象の短い年限を含む4銘柄計500億円発行し、鉄道会社の発行額が全体の6割超を占めた。

◎ 主要債券月間四本値 ◎

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#359	0.020(3日)	0.000(5日)	0.055(28日)	0.045(31日)
#358	0.005(3日)	-0.015(5日)	0.045(28日)	0.035(31日)
#348	-0.105(3日)	-0.125(5日)	-0.040(28日)	-0.040(28日)
#144(5Y)	-0.115(3日)	-0.130(5日)	-0.070(28日)	-0.070(31日)
#173(20Y)	0.400(3日)	0.370(5日)	0.440(28日)	0.420(31日)
#924-#932TDB(6M)	-0.172(3日)	-0.172(3日)	-0.110(24日)	-0.122(28日)
#926-#933TDB(3M)	-0.082(3日)	-0.135(31日)	-0.059(12日)	-0.127(31日)